清代における金蓋山龍門派の設立と『金華宗旨』

THE SECRET OF THE GOLDEN FLOWER AND THE ESTABLISHMENT OF
THE LONGMEN TRADITION AT MT. JIN'GAI DURING THE QING DYNASTY

モニカ・エスポジト
Monica Esposito
（京都大学人文科学研究所）

はじめに

『金華宗旨』は著名な内丹書で、その存在は一九二九年にリチャード・ヴィルヘルムの翻訳を通じて西洋に知られることとなりました。この翻訳は、*Das Geheimnis der Goldenen Blüte: ein chinesisches Lebensbuch* というタイトルで出版され、カール・ユングの解説が寄せられています。ヴィルヘルムが底本として使用したのは一九二一年に出版された湛然慧版で、これは、訳者本人が説明しているように、書店と古物商でひしめく北京の琉璃廠で発見されたのでありました。この本は西洋で大きな成功を収め、何度も再校され再版されました。また、様々な言語に翻訳されて世界中に紹介され、日本や中国でも、このヴィルヘルム版は翻訳、紹介されたのです。

英訳版：Translation by C. F. Baynes, *The Secret of the Golden Flower: A Chinese Book of Life*, London, Kegan Paul, Trench, Trubner and Co, 1931.
日本語版： 湯浅泰雄, 定方昭夫訳『黄金の華の秘密』京都：人文書院、 一九七三年 (二〇〇四年再版)。
中国語版：通仙仙訳『金華養生秘旨與分析心理學』北京：新華書店、一九九三年。

先ごろ、このヴィルヘルムによる『黄金の華の秘密』の英訳が電子文献の体裁でインターネット上に登場しました。インターネット上の解説は、この文献を呂洞賓と光の宗教という謎の宗教とに関係する、深遠な秘伝の書である、としています。さらに、ゾロアスター教の開祖、ゾロアスターやエジプト錬金術の伝説的な創始者、ヘルメス・トリスメギストスとも関わっているといいます。これもヴィルヘルムの考えだったのでしょうか？

序の部分で、ヴィルヘルムはこの文献を見た時の話をしています。この中国のテキストは、その称するところによれば、呂洞賓によって記されたのだいいます。ヴィルヘルムによれば、呂洞賓は八世紀の人物で、後に民間伝承の中で八仙に列せられたのだといいます。呂は七九六年頃に生まれ、所謂金丹教を起こしたのだ、とヴィルヘルムは主張します。この金丹教が、ヴィルヘルムの目には、練丹の新しい解釈を打ち立てた、唐代から続く秘伝で秘密の宗教として映ったのです。この「新しいタイプの練丹術」の中では、練丹の材料は、もはや、不死の薬、エリクシルを製造するための物質的素材ではなく、心理作用の象徴となったのだ、とヴィルヘルムは説明しています。これが、解説を寄せるほどにまで、ユングがこの書物に興味をもった主な理由の一つです。ヴィルヘルムは、この「新しいタイプの錬丹術」を、諸説統合的に描き出しています。日本人研究者であった佐伯好郎 （一八七一ー一九六五）の著作、『景教碑文研究』に感銘を受けたヴィルヘルムは、呂洞賓とキリスト教ネストリウス派との間に関連を見出したのです。

こうして、呂の教えはペルシャの光の宗教(いわゆるネストリウス教)とも関連することになりました。

さて、ヴィルヘルムが思い描いた幻想的な歴史についてはこれくらいにして、今度はこの文献の本当の起源と歴史を見てみることにしましょう。

七つのテキスト

私が知る限り、この文献には、お手元の資料Ａに挙げた七種類のテキストが存在します。ご覧になればおわかりのように、全ての版において、この『金華宗旨』という文献は、効果的に、神仙・呂洞賓の作に帰されています。更に、最初の三つのテキストは、所謂『呂祖全書』の中に含まれているのです。『呂祖全書』の初版は、一七四四年、劉体恕によって三二巻本として出されました。しかし、この時には『金華宗旨』は収められていません。『金華宗旨』が出版されるのは、一七七五年になってから、邵志琳の手による改訂版『呂祖全書』六四巻においてなのです。

邵志琳版と太乙法派

邵志琳の序によると、『金華宗旨』は、蘇州の呉氏の写本からに由来します。この書物は、浄明祖師の許遜から、口伝されてきたものの成果である、と言われています。この口伝は、一六六八年、江蘇の毘陵壇において、浄明道に所属する七人に与えられました。著名な全真教の真人、邱処機と譚処端と共に、神仙・呂洞賓が降壇したと言います。しかし、「降壇」とはいったいどういうことなのでしょう？「扶乩」または「飛鸞」はもっとも一般的な占いの一つで、明清期には、高級官僚、文人、そして一般人の間でも行われていました。一六六三年にヨーロッパで出されたある本は、こうした活動を「これ以上一般的なものはないくらいに一般的である」と評しています。そして、今日の香港や台湾でも流行しているのです。神仙や過去の著名な真人・道士・大仙師たちが乩架と呼ばれる霊的自動書記のための道具に降りてくると、今も昔も信じられています。媒介者によって支えられている、彫刻を施された木製の棒が、乩盤または砂盤と呼ばれる砂で覆われた皿の上に自動的に文字を描き出しています。明清期の道教文献のほとんどは、まさにこのようにして啓示されてきました。そして、恐らく、『金華宗旨』の原本もまた、このようにして記されたのでしょう。

しかし、邵志琳が序で語るように、二回目の呂洞賓の降壇の後屠乾元が全ての教えを記録し、張坎真にゆだねてその記録を修正し、校正して本の体裁に整えたのは、一六九二年になってからのことでした。この本は、もともと二十章から成り立っていました。それは、譚処端真人によるお告げから始まっています。譚処端は門弟たちに五則の教えを垂れましたが、お手元の資料Ｂ、附１にありますように、そのうちの四つ、(a)開宗闡教 (b)浄明源流 (c)太乙法派 (d)戒律、だけしか今日に伝えられていません。乩壇の弟子たちに対し、『金華宗旨』の教えは許遜に始まるということについて念を押した後、譚真人は浄明道の歴史を明らかにしています。譚真人は次のように説明します。

つまり、浄明道の失われた伝統を蘇らせる、ということのために、『金華宗旨』は啓示されたのでした。更に譚真人は、新しい宗派が形成されたということを説明します。

「金華太乙の教え」を受けた門弟たちは、こうして、八卦から一字取った派名を与えられたのでした。例えば『金華宗旨』を授かった初代の門弟たちは、屠乾元のように乾の字がつけられており、この字によって彼等が第一代に所属していることがわかるようになっているのです。第二代に所属する人々の名前は、張坎真のように坎の一字が入れられています。このようにして代々派名がつけられていったのです。太乙法派(つまり太乙金華法派)に入信した人々は、こうした派名を授かった後、呂洞賓から宗旨を授かります。そして最後に邱処機から指導を受けます。邱真人による二則の訓示が示すように、邱真人はたくさんの暗誦文や祈祷文などを含む特別な儀礼を教えています。

編者である邵志琳は、お手持ちの資料 B の１に載せてある序の中で、次のように強調しています。「宗旨」というタイトルにも関わらず、呂洞賓の教えは二番目に位置している、つまり、譚真人の教えより後に位置している、というのです。こうした配置が、読者を文献の内容と違う方向に導いてしまうかもしれない、或いはこの書物を「金華宗旨」ならぬ「金華科儀」であるかのように勘違いさせてしまうかもしれない。そう心配した邵志琳は、書物の体裁を修正し、章を二十から十三に減らしました。また、邱真人と譚真人による教示は、附１と附２のように、最後に添えられることとなったのです。言い換えるなら、現在我々に伝わっている『金華宗旨』が全て一三巻本という体裁であるということは、邵志琳の編纂という介入が有ったからだといえるのです。

さて、ここまでの、邵志琳の手による『金華宗旨』の初版についての話をまとめるにあたり、『金華宗旨』の教えは、元来浄明道に所属する人々に伝えられたものであったという事実に、もう一度ご注目いただきたいと思います。お手元の資料 B の１に挙げた序の中で邵志琳自身が注意を喚起しているように、この浄明道の系譜は南北全真教のいずれの宗派にも属していません。また、我々は、この教えの受領者たちが新たな宗派である太乙法派を設立したことを見てきました。この宗派の起源は浄明道とその祖師である許遜への崇拝に求めることができます。しかし、この新しい系譜の中では、呂洞賓こそが開宗の祖師とされているのです。宗旨を授かる前に、この壇の弟子たちは派名を授けられています。その後、邱処機から宗教的修行方法と儀礼についての指導を受けていました。そして、編者の邵志琳は、これら、伝度儀礼(initiation/ordination)を「金華科儀」と呼んでいました。邵志琳の意図は明確です。彼は、この文献を、呂洞賓によって伝えられた道教の宗旨、分派的で科儀的な修練から解き放たれた宗旨として提示しようとしたのです。しかし、これから見ていくように、このような目的を心に抱いていた編者は、邵志琳だけではなかったのです。

陳謀版と金華嗣派

特定の地域の毘陵壇と結びつき、分派的で科儀的な内容を削除しようとする動きは、陳謀による『呂祖全書宗正』に含まれる『金華宗旨』の第二版においても続いていました。現在も京都の大谷大学図書館に所蔵されているこのテキストは、一八五二年、呂洞賓の信者たちと地元の廟の協力を得て、陳謀によって復元されたものです。この書は、江蘇地方に流布していた、清代の学者、 彭啟豐によってまとめられた『全書宗正』十八巻から派生したものです。この『呂祖全集宗正』の版木は、呂洞賓を信仰する高官によって保護保管されていました。出版は一八五二年でしたが、『全書宗正』という名前自

体はすでに一七四七年、翰林院の一員が二人の高官から版木を彫るように求められた時点で知られていました。以上のことは、一八〇三年の蔣元庭がこの陳謀版に基づいていると言われることと私が蔣元庭を陳謀版の後に挙げていることへの説明となります。この陳版では、毘陵壇の弟子たちを示す「浄明嗣派」という呼称は、「金華嗣派」に変えられています。 しかし、太乙金華の省略形である金華という法派についての説明は、加えられていません。それどころか、派詩もなければ科儀もなく、何よりも所在地すら特定されていません。毘陵壇や、こうした教示が起きた時期などに関する言及は全て除かれており、また、壇の門弟による序すらありません。

蔣元庭版と天仙派

お手元の資料 A、3 番と 4 番をご覧ください。この『金華宗旨』の第三版と第四版は、『全書正宗』と『道蔵輯要』という二つのコレクションに収められています。どちらも蔣元庭（一七五五ー一八一九)という同じ編者によって編纂されたものです。

以前の二つのテキストと比べると、第三版と第四版のテキストは更に一歩進んだといえます。ここでは、新しい、天仙派と言う流派が紹介されているのです。結果的に、蔣元庭の手による第三、第四版においては、本の書名すら変わり、天仙派の『金華宗旨』という意味で『天仙金華宗旨』とされています。この新しい書名は、呂洞賓が、今や、天仙派という新しい宗派の単なる開宗の祖師であるだけではなく、門弟たちにその教えの宗旨を開示できるたった一人の人物であるという事実を表現しているのです。この宗派に関する更なる情報は、蔣元庭の弟子である志秋によって書かれた後跋に記されています。ここに登場する詩句は、天仙派の派詩のことを指しています。この宗派では、呂祖を始祖として、また宏教恩師（柳守元）を二祖として祭っています。最近の森由利亜先生のご研究によって、蔣元庭が北京に覚源壇または第一開化壇として知られる、神霊が降臨して自動書記を行う扶乩壇を設立した高官であるということが明らかになっています。この扶乩壇での霊示こそが、『全書正宗』と清代の重要な道教経典である『道蔵輯要』の編纂の源泉であったのです。壇を開設することと、そこで行われる扶乩を通じて宗教的な書物を生産し、また広めていくという活動は、清代道教の活動の中心となるものでした。

さて、蔣元庭の壇について我々は、彼のこうした宗教的活動が、白雲観として知られる北京の全真教系十方叢林において認められていたということを、知っています。実際、先に紹介した天仙派の派詩は、『諸真宗派総簿』に挙げられています。この文書は白雲観に所蔵されていたもので、一九二七年、日本人学者の小柳司気太によって書写され、彼の『白雲観志』（九六頁）に収められています。この派詩は純陽派のところに列せられています。純陽派は、白雲観とその全真系叢林において呂洞賓の法脈の一つであると認識されていた宗派です。

閔一得版と龍門派

第十一代龍門派祖師、閔一得の編集を経て、『金華宗旨』は龍門派のネットワークに参入します。この宗派との関係がどういう役割を果したのかを知るために、まず、龍

門派が清代においていったいどういったものを代表していたのかを理解しなくてはなりません。龍門派は、全真教に連なる一流派で、後期王朝期を通じて最も重要な道教の一派でありました。仏教の中では、臨済の宗派が数においてもにも、また制度的に優勢でした。伝戒を行う特権を独占していたからです。道教においては、龍門派が同じ理由で優勢を誇っていたのです。このことは、『長春道教源流』に記されています。仏教における臨済がそうであるように、「龍門」というのは、清代から今日に至るまで、正統的な道士を意味する、一般的な表象のようなものなのです。道教の寺院に入門するということは、取りも直さず、龍門派の伝戒を授かったということを意味しました。この伝戒には、派名を与えることの外に特別な宗教的修練と儀式のやり方が含まれます。これら全ては、全真系叢林の首座を務める龍門派の方丈によって授けられるのです。十方叢林の中でも最も重要だったのが、首都、北京の白雲観でした。そこは、龍門派の神話的な開祖であり、全真教の真人である邱処機（一一四八〜一二二七）の墓を擁する、聖域なのです。更に、白雲観には清代龍門派の伝説的指導者である王崑陽（?〜一六八〇）の祠堂も有しています。素晴らしく空想的な系譜の中で、第七代の祖師とされる王崑陽は、龍門派開宗神話における中心的人物となっています。公開伝戒制度が全中国に伝えられる前に、王崑陽が康熙帝（一六六二〜一七二二）の後援を得て、その改革をしたのだと言われています。伝えられるところによると、龍門派の名の下に王崑陽によって再興された伝戒は、一六五六年、白雲観において、初めて執り行われたのだといいます。この伝戒は、仏教でいう「新戒堂」のなぞりではないかと思われる、所謂「演鉢堂」において、百日間に渡って行われます。この、世俗から遮断された一定期間の間、受戒者たちは儀式のやり方を授かり、儀礼を学び、そして苦行を行うのです。仏教徒の僧院における伝戒をひな型とした道教の伝戒は、「三壇大戒」として知られていました。これは、初真戒、中極戒そして天仙大戒から成り立っており、この三種類の戒律、全て授かった人だけが、他人に戒を授ける地位につくことができるのです。王崑陽に始まった北京の白雲観の方丈、つまり龍門派の律師という伝戒の特権を持つ役職は、このようにして、龍門派の方丈によって戒律をうけた道士たちに受け継がれていきました。この事実は、龍門派の正統化と、その全中国への流布にとって、決定的なことだったのです。

さて、ここで『金華宗旨』第五版へ話を戻しましょう。これから見ていくように、編者の閔一得は、この版の正統性を主張するために、このテキストと王崑陽祖師とを結び付けるのです。この第五版では、『金華宗旨』の全く新しい歴史が提示されています。この歴史は、閔一得自身による序の中で次のように語られています。「『金華宗旨』は神仙・呂洞賓の手によって書かれた。この文献の核となる部分は、呂洞賓、証道の折の詩である『至教宗旨』から派生したものである。これらの詩句は宋元代を通じて、梓行された状態で伝わってきたものであるといわれている」と。このように、それまでのテキストとは違い、閔一得の序では、『金華宗旨』の起源はより早い時期にある、という説が提案されています。閔一得によれば、この書は、一六八八年の金蓋龍嶠山房にて、七人の医世、つまり世直しをする素質を持つ人々に対し、「医世張本」として啓示されたのだといいます。つまり、扶乩によって『金華宗旨』が下されたのは、七人の浄明道の信徒にではなく、七人の龍門派の祖師たちにであったのだ。しかも、今日の浙江省湖州の外れに位置する小さな山、金蓋山龍門派の祖師たちにこそ、霊示されたのだ、と閔

一得は主張しているのです。ここでいう、七人の龍門派祖師とは、陶靖菴（一六一六〜一六七三）、黄隠真（一五九五〜一六七三）、盛青崖（fl. 一六四七）などを指しています。閔一得によれば、扶乩による霊示は江蘇地方の毘陵壇で起きたのではなく、金蓋龍嶠山房の宗壇で起こり、そこで本山の先哲である陶石菴が印刷したのだと言うのです。金蓋山の宗壇の伝統は、七人の祖師の最初の二人、陶靖菴と黄隠真にまで遡ります。一六七三年にこの二祖が逝去した後、宗壇は陶石菴に引き継がれたと言われています。これは、閔一得によって、『金華宗旨』の印刷を行ったとされている人物です。この宗壇の伝統は、呂洞賓と、金蓋山と関連づけられる地元の人物、衛正節の崇拝に根ざしていたことを意味しています。衛正節は有徳の儒家で、宋代の終わりに金蓋山に隠遁し、その地に図書館をたてた人物です。ここでご紹介した一節は、金蓋山の宗壇を中心に形成された地元信者たちによる権威の需要があったことを明らかにしている点で、重要です。この宗壇の伝統は邱処機と王崑陽の律宗に取って代わろうとはしなかったのだ。そう主張することで、神話的な創始者と北京の白雲観における龍門派戒壇の理想的再興者への忠誠を、金蓋山社会は誓っているのです。ここでいう創始者は龍門派の伝説的開祖である邱処機のことです。ご存知のように、龍門派という名前は、邱処機が龍門山に隠遁して苦行を行なったことに由来しています。邱処機という人物は、元代における全真系十方叢林の設立と結び付けられているのです。また、ここでいう再興者はとは、清代に龍門派の名の下に、邱処機の十方叢林系の伝統、律派を再興した王崑陽を指しています。言い換えれば、ご紹介した一節は地元の信仰を龍門派の指揮の下に置くということで、同意しているのです。更に、編者閔一得は、金蓋山の『金華宗旨』、つまり「医世張本」と、その受領者たちを、共に「医世」という言葉で括っています。この言葉は、より一般的な「済世」或いは「度世」という表現のなぞりですが、龍門派における新しい宗派である医世宗と医世宗の教えである救済論を特徴づけるという点で非常に重要となります。

『金華宗旨』の初版によれば、この書の流伝は太乙派が、浄明道の失われた伝統を復活するために始めたとされていました。しかし、この第五版では、医世宗という新しい宗派が、その金蓋山における存在を、正統的全真系龍門派の枠組みの中で認められるようになっているのです。この医世宗についての更なる情報は、閔一得による注に含まれています。

このようにして、所謂医世宗は金蓋山律宗の秘伝を象徴することとなり、同時に王崑陽によって再建されたと言われる龍門正統律宗と並立することとなったのです。奥儀まで到達できない弟子が師匠の指導の下で読むようにと指示されているのは、『碧苑壇経』に所収されている王崑陽の教えのことです。事実、この『碧苑壇経』は、一六六三年に、南京の碧苑観で行われた戒壇での、王崑陽の講話を記録したものです。さて、閔一得は、この新しい宗派を正統化し、また『金華宗旨』をこの地元の信仰と一体化させるために、王崑陽と陶靖菴、黄隠真との次のような出会いについて語っています。それによれば、一六八八年に陶靖菴と黄隠真は王崑陽に『金華宗旨』を贈呈し、王はこの書を、世を救うための太上老君の心伝、「太上心伝」であると認識したというのです。

一六八八年という、この邂逅があったとされる時期から始まるこの一節。これが絵空事であるということは明白です。陶靖菴と黄隠真、更には王崑陽律祖すらも、この出

会いがあったとされる時には、既に亡くなっているのです。しかし、閔一得によって創作されたこの伝説は、おおむね、次の三点を示唆しています。

（一）一六八八年は、閔一得によれば『金華宗旨』が金蓋山の宗壇に扶乩によって霊示された年であり、また、金蓋山の扶乩壇の主要な「マネージャー」である陶靖菴と黄隠真の二人が、この書を王崑陽に贈呈した年でもありました。

（二）龍門派の伝戒の復興者であった王崑陽は、この文献を老子から直接流伝したものである、と認定しました。

（三）この、王崑陽のお墨付きによって、『金華宗旨』は済世のための最高の心伝であり、またそれが今や金蓋山の祖師たちによって奉じられているのであるということが、正式に認識されたのです。

この、最後の点は、金蓋山の人々にとって、非常に重要な含蓄となります。なぜなら、このことは、王崑陽の継承者として金蓋山に開設された、新しい伝戒規範の元となる全ての経典、つまり医世の経典と、『金華宗旨』とを結び付けることになるからです。こうした方針は、閔一得によって記された逸話の中に、次のように記されています。「順治(一六四四〜一六六一)康熙(一六六二〜一七二二)年間に崑陽が白雲観で伝戒を行った。この時、太上三大戒と呼ばれる正統的訓戒が受戒者たちに授けられた。また、正式な伝戒の儀礼の中で、『呂祖医世説述』という書物も授けられた。引用文が強調するところによれば、この折の伝戒は公開で行われており、しかも、国家の統制の下で行われていたようだ。派詩、老子から始まる系譜を載せた手巻、律と書も受戒者たちに伝えられた。しかし、王崑陽から三代の後に、この伝戒は失われてしまったのである。」

つまり、金蓋山に所持されていた医世という経典のおかげで、この山の祖師たちは今や、順治康熙年間に王崑陽によって首都で再建されたといわれる、龍門正統律宗の、正式な後継者となったのです。特に、同じく金蓋山で啓示され、『金華宗旨』と同じように陶石菴によって印刷された、『呂祖医世説述』という文献のおかげで、この山の祖師たちは伝戒を行うことを許されたのです。『呂祖医世説述』は、老子の正統な訓示である太上三大戒が白雲観に伝えられた黄金期を復興する、という目的で製作されたものです。首都の全真教系叢林で伝戒を再構築した、という王崑陽の理想的な行動を再現することで、金蓋山の祖師たちは今や独自の伝度を正統化したのです。

しかし、金蓋山祖師たちにとって、この伝度は叢林における戒壇において行われるものではなくなっていました。 なぜなら、閔一得が主張するように、そうした場での訓示の流伝は正確さに欠け、また邱処機による訓示の本は、『浄明宗教録』などの一般文献に置き換えられていたからです。一方で、『呂祖医世説述』や『金華宗旨』など真の文献が「太上老君の心伝」であるたった一つの本当の教えを復活できるのは、金蓋山の扶乩壇においてのみでした。邱処機と王崑陽の龍門正統律宗の秘伝を継承した医世宗のおかげで、この訓示の直接の流伝が、今や呂洞賓を通じて行われるようになったのです。金蓋山宗壇での『金華宗旨』は、この過去から現在へと連なる理想的な祖師たちの系譜の中に、その居場所を見つけたのです。

結論

最後に、なぜ様々な宗派が『金華宗旨』を私的に適用しようとしたのか、なぜこの文献が重要であったのかを考えてみましょう。タイトルの『宗旨』という言葉が示すように、この文献には宗派の教義が述べられています。そこには、「伝度」の儀礼と派名の授与を通じて、系譜上の神聖な祖師たちに帰依するシステムが設定されているのです。これは、太上老君からの直接の伝統が、道教祖師呂洞賓を通じて伝えられたことを表しています。実際、この文献は、「教外別伝」という禅形式の呼称でも呼ばれています。禅宗における達磨大師のように、呂洞賓は、老子という正統道教の神秘的な宗祖と直接に繋がる、肝心要の人物なのです。広く流行した扶乩のおかげで、この結びつきは清代を通じて具象化されました。この扶乩という活動は、祖師呂洞賓と人々とが直接的に触れ合う機会を与えたのです。呂洞賓はそれぞれの宗派が開く扶乩壇に降りてきて、訓示や派名を与えてくれるのです。こうした直接的コンタクトを通じて、壇徒たちは呂洞賓の門弟であるという認識を抱き、最終的に正統道教の中に融合されていくのです。確立した宗教団体が内外に扶乩壇を開設するというのは、今日の香港や台湾においても未だによく目にする現象です。こうした現象は、『金華宗旨』が属していた後期王朝期の宗教の実態を理解する、助けとなるのです。その歴史は、この書の伝説の作者が呂洞賓であるという伝承を、部分的に形作っています。道教の神話において、八仙の一人に列せられる祖師呂洞賓は、道教徒のアイデンティティーを形成する上で、根幹の役割を演じているのです。最終的に、龍門派の伝戒が中国中に広まったため、このアイデンティティーは、清代のうちに、全ての全真系叢林の中に確立されました。こうしたアイデンティティーは老子を道祖、呂洞賓を道宗など、明らかに系譜的な呼称で呼ぶことによって示されています。こうした「家系図」は、伝戒において与えられる、授戒の証明書である戒牒、によって明示される標準化された道教アイデンティティーの下に、全ての地元の信仰を集約しました。こうした戒牒は、もともと白雲観の龍門派方丈の監督の下、国から発行されていました。 今では、白雲観には道教協会が置かれています。

『金華宗旨』というテキストの歴史は、王崑陽のメガフォンから聞こえる、耳を塞ぎたくなるほどの布教喧伝の下に隠された、各地域の道教信仰間での争いの影響を、我々に伝えてくれています。その最前線では、全真系の天仙派や龍門派が一方に、そして全真道に連ならない浄明道や太乙金華派がもう一方に対峙しているのです。蔣元庭や閔一得による序や注釈の行間から読み取れるように、こうした競争は、道教伝統の遺産を相続し、そうすることで正しい伝戒の流伝が保証できるような文献を取捨選択する上で起こったのです。閔一得の注釈は、王崑陽の時代の龍門派の隆盛は、その三代後に“本当の伝戒、太上三大戒の流伝”が中断された時点で終わってしまったことを示しています。金蓋山の祖師たちは、王崑陽の理想的伝戒の流伝に新しい流伝のモデルを浸透させることによって、「改良された全真道」を再建しようとしました。対照的に、浄明道と、恐らくは霊宝儀礼により通じていたと思われる浄明道の分派は、正統全真道に新しい儀礼の形式を紹介したのです。天仙派にして金蓋山龍門派の祖師たちによるこうした全ての努力にも関わらず、嘉慶帝期に改正されたといわれる伝戒の中では、浄明道が重要な位置をしめているようです。しかし、一方では、叢林での戒壇から遠く離れた宗

壇のおかげで、龍門派というラベルの下の支派たちは、彼等独自の伝統を続けることができたのです。また、派単と呼ばれる、彼等独自の伝度（initiation/ordination）の証明を発行することも許されました。

『金華宗旨』というテキストの歴史は、このように、未だ謎に包まれた清代道教を理解する助けとなってくれます。それは我々に、いつ、どのようにして、そして何故、新しい正統化の論理が生まれてきたのかを教えてくれるのです。『金華宗旨』という文献を通じて、たくさんの宗派がそれぞれの系譜にまつわる土着の神話を正統化しています。また、「全眞系龍門派」や「浄明道」など、重要な道教の伝統を持つ表彰の下に、地元で信仰の対象となっている人物たちを正統化しているのです。何よりも、『金華宗旨』とういテキストの歴史は、道教流派とそこから生まれてきた新しい宗派の正統化の過程を指すものであり、新しい系譜を正統化するという、彼等の意思を示すものなのです。そして、こうした系譜の正統化において、呂洞賓という人物がとても重要であったのです。中国において、こうした素晴らしい経歴を持っていた呂洞賓に、ヘルメス・トリスメギストスやゾロアスターたちとの関係まであったのだとしたら・・・。それは本当に驚くべきことではないでしょうか？

参考文献

＜日本語・中国語参考文献＞

五十嵐賢隆『太清宮志』、東京：国書刊行会、一九八六年（一九三八年第一版）。

王志忠「論明末清初全真教中興的成因」『宗教學研究』第三期、一九九五、三二〜三八頁所収。
――――『明清全真論稿』、成都：巴蜀書社、二〇〇〇年。

小柳司氣太『白雲觀志』、東京：東方文化学院東京研究所、一九三四年。

志賀市子『中國のこっくりさん』、東京：大修館書店、二〇〇三年。

陳兵「清代全真龍門派的中興」『世界宗教研究』第二期 、一九八八、八四〜九六頁所収。

閔智亭『道教儀範』、北京：中國道教學院、一九九〇年。

森由利亞「全真教龍門派系譜考」（道教文化研究会編『道教文化への展望』、一八一〜二一一頁所収） 東京：平河出版、一九九四年。
――――「『太乙金華宗旨』の成立と変遷」『東洋の思想と宗教』一五號、一九九八、四三〜六四頁所収.
――――「呂洞賓と全真教－清朝湖州金蓋山の事例を中心に」（野口鐵郎編『講座道教第一巻―道教の神々と経典』、二四二〜二六四頁所収）東京：雄山閣、一九九九年。
――――「『道藏輯要』と蔣予蒲の呂祖扶乩信仰」『東方宗教』九八號、二〇〇一、三三〜頁所収。

吉岡義豊『永世への願い：道教』、京都：淡交社、一九七〇年。

——『道教の実態』、京都：朋友書店、一九七五年。

李養正『新編北京白雲觀志』、北京：宗教文化出版、二〇〇三年。

<西洋語参考文献>

Esposito, Monica. "Il Segreto del Fiore d'Oro e la tradizione Longmen del Monte Jin'gai." In P. Corradini, ed., *Conoscenza e interpretazione della civiltá cinese*, 151-169. Venezia: Cafoscarina, 1996.

————. "The Different Versions of the *Secret of the Golden Flower* and Their Relationship with the Longmen School." *Transactions of the International Conference of Eastern Studies* 43, 1998: 90-110.

————."Longmen pai yu *Jinhua zongzhi* banben laiyuan" 龍門派與『金華宗旨』版本來源. Paper presented at the Research Meeting on Daoist Culture, Waseda University, Tokyo, 1998.

————. "Longmen Taoism in Qing China: Doctrinal Ideal and Local Reality." *Journal of Chinese Religion* 29 (2001): 191-231.

————. "The Longmen School and its Controversial History during the Qing Dynasty." In John Lagerwey ed., *Religion and Chinese Society: The Transformation of a Field*, vol. 2, 621-698. Hong Kong: Ecole française d'Extreme-Orient & Chinese University of Hong Kong, 2004.

Goossaert, Vincent. "The Quanzhen Clergy, 1700-1950." In John Lagerwey ed., *Religion and Chinese Society*, vol. 2, 699-771. Hong Kong: Ecole française d'Extreme-Orient & Chinese University of Hong Kong, 2004.

Marsone, Pierre. "Le Baiyun guan de Pékin: épigraphie et histoire." *Sanjiao wenxian* 3 (1999): 73-136.

Mori, Yuria. "Identity and Lineage: The *Taiyi jinhua zongzhi* and the Spirit-writing Cult to Patriarch Lü in Qing China." In Livia Kohn & Harold D. Roth eds., *Daoist Identity: History, Lineage, and Ritual*, 168-187. Honolulu: University of Hawaii Press, 2002.

Yoshioka, Yoshitoyo. "Taoist Monastic Life." In Homes Welch & Anna Seidel, eds., *Facets of Taoism*, 229-252. New Haven and London: Yale University Press, 1979.

資料

資料 A:『金華宗旨』の七種の版本

(1) 清・邵志琳 (一七四八〜一八一〇) 編『呂祖全書』[六十四巻、二十七冊、一七七五年] 弟四十九巻(弟二十三冊)『先天虚無太乙金華宗旨』
(2) 清・陳謀編 / 修補『呂祖全書宗正』十八巻 (九冊)一八五二年、第十巻(第七冊)『先天虚無太乙金華宗旨』
(3) 清・蔣元庭 (予蒲、一七五六〜一八一九) 編『全書正宗』十六巻 一八〇三、第二巻『孚佑上帝天仙金華宗旨』
(4) 清・蔣元庭 (予蒲、一七五六〜一八一九) 編『道藏輯要 』(室集二), ca. 一七九六〜一八一九年『金華宗旨』(道藏輯要) 。また再版されたものとして、清・賀龍驤、彭瀚然、閻永和編『重刊道藏輯要』(二仙菴, 一九〇六年)がある。.
(5) 清・閔一得 (一七五八〜一八三六) 編『道藏續編』二十三種（四冊）一八三四年、第一種 (第一冊) 『呂祖師先天虚無太一金華宗旨』
(6) 姚濟蒼(合道子) 編印『太乙金華宗旨』書名為『長生術』一九一七年。
(7) 湛然慧真子編印並注『太乙金華宗旨』書名為『長生術續命方合刊』一九二一年。

資料 B: 邵志琳 編『呂祖全書』四十九巻『先天虚無太乙金華宗旨』

(序 1) 呂祖全書先天虚無太乙金華宗旨小序 [邵志琳小序 乾隆乙未 (一七七五年)] (資料Ｂ－１も参照のこと。)

『呂祖全書』巻四十九目錄

(序 2) 孝梯王宗旨原序 (一六九二年)
(序 3) 許旌陽宗旨原序 (一六九二年)
(序 4) 孚佑帝君宗旨自序(一六九二年)
(序 5) 張三丰宗旨原序 (一六九二年)
(序 6) 邱長春真人宗旨原序(一六九二年)
(序 7) 譚長真真人宗旨原序 (一六九二年)
(序 8) 王天君宗旨原序 (一六九二年)
(序 9) 潘易菴 (乾德) (一六九二年)
(序 10) 劉度菴(乾善) (一六九二年)
(序 11) 許深菴(乾亨) (一六九二年)
(序 12) 顧旦初(日融) 一六九五年)
(序 13) 莊惺菴(乾微)(一六九三年)
(序 14) 屠宇菴 (乾元) (一六九二年)
(序 15) 張爽菴(坎真) (一六九二年)

『先天虚無太乙金華宗旨』全十三章

(附 1)譚真人垂示五則 (a) 開宗闡教 (b) 淨明源流 (c) 太乙法派 (d) 戒律

(附 1)邱真人垂示二則 (a) 行持(b) 授記（この(a) の行持は、徳を積むことに焦点を当てた倫理的文献『太上感應鴻文』の暗誦や、『斗母心咒』と『天皇心咒』を日々諷誦すること、また、天尊、九仏、天君など神仏の宝号を暗誦することなどから成り立っている。）

B-1 「呂祖全書先天虛無太乙金華宗旨小序」［邵志琳小序 乾隆乙未（一七七五年)］

金華宗旨一編，出自蘇門吳氏抄本。闡説存心養性之學，多與儒釋二教相同。其初係旌陽真君受斗中孝悌王之傳，不落言詮文字。所謂淨明大法，忠孝雷霆是也。洎康熙戊申歲(一六六八年)，我呂祖奉敕偕邱譚二真，降壇於毘陵白龍精舍，宣揚宗旨。傳示淨明法派潘乾德等七人。後緣人多物故，星散不齊。孝悌王於康熙壬申(一六九二年)仲夏，復奉帝敕，重提宗旨。時有屠乾元，付茲簡於張坎真，訂輯成書，兼錄祖師及諸真弟子序。時師於古紅梅閣，又授是旨於坎真等七人。合諸前七人，皆係淨明法派，不在南北兩宗。乃祖師代旌陽闡述宗旨，以詔後學也。夫是書編次之列，與醫卜星相等書，判然迥別，彼則從淺入深，引人入勝，不嫌由輕及重，由顯及微，茲既以金華宗旨名篇。自宜以開説宗旨淵微，闡明心性筌蹄處，列諸前帙。使學者顧名思義，開卷了然。其餘邱譚二真之説，非不詳述源流戒律行持大略，而于本旨切要處，了無當焉。張君祇依降筆先後，籠統列為二十章。前譚真，次呂祖，終邱真。不分所言輕重，未免本末失宜。恐後日閲書者，初時展卷，咸目為金華科儀矣。則於祖師宗旨之名，反多岐視。今既採入全書，自應仿照劉本章程。斟酌盡善，何可仍張君原訂，漫無區別也。謹祖師所宣宗旨十三章弁首，而譚邱二真之説，作為宗旨垂示，附于卷末。其中有立言似非正大，字句涉於舛訛者，悉皆刪正之。庶使後學諸賢，審祖師的要旨，而推類以盡其餘也。設有責以妄易成書者，予亦何敢辭其罪乎。

B-2「淨明源流」『譚真人垂示五則』

再七代，有玉真、中黄兩先生繼之。今又失其傳，故吾特為演出，即《宗旨》是也。

七代の後、玉真（つまり劉玉〔一二五七〜一三一〇〕）と中黄（つまり黄元吉〔一二七〇〜一三二五〕）の両氏が（許遜の）教えを継いだ。今、又その伝統は失われたので我々が特に提示する。すなわち、『〔金華〕宗旨』がそれである。

B-3「太乙法派」『譚真人垂示五則』

真人曰: 金華太乙之傳，另有宗派，以純陽聖祖為第一代開宗大道師。此三教中大綱領，仙釋中真骨髓也。在壇弟子，俱依乾坎艮震，巽離坤兑為次。

譚真人は言った。「金華太乙の教えには、純陽聖祖（つまり呂洞賓）を第一代開宗の大道師とする別の宗派がある。これは、三教の中の大綱領にして、神仙の教えと釈迦の教えの真髄である。この壇の弟子たちは、乾坎艮震、巽離坤兑の順に（派名をつけるべきである。）

資料 C: 清・陳謀編 / 修補『呂祖全書宗正』十八巻 (九冊)一八五二年、第十巻(第七冊)「先天虚無太乙金華宗旨」

(序 1) 孝梯王太乙金華宗旨原序
(序 2) 許旌陽真君太乙金華宗旨原序
(序 3) 孚佑帝君太乙金華宗旨自序
(序 4) 張三丰師太乙金華宗旨原序
(序 5) 邱長春真人太乙金華宗旨原序
(序 6) 譚長真真人太乙金華宗旨原序
(序 7) 王天君太乙金華宗旨原序
(序 8) 屠宇菴題太乙金華宗旨緣起 [金華嗣派弟子屠乾元、 記述時期、場所なし]
(序 9) 通宵子金華宗旨識 [嗣派弟子通宵]

『先天虚無太乙金華宗旨』全十三章

神霄待宸譚長真真人宗旨垂示 (目次には、「譚真人垂示」と省略されて掲載されており、また、この垂示には次の二点のみが含まれている。 (a) 開宗闡教 (b) 太乙金華源流。)

資料 D: 清・蔣元庭 (予清、一七五六〜一八一九) 編『全書正宗』十六巻 一八〇三年、第二巻「孚佑上帝天仙金華宗旨」

(序 1) 天仙金華宗旨自序 [呂嚴]
(序 2) 宏教弟子柳守元
(序 3) 列聖寶訓題辭 [(a) 孝梯王; (b) 許旌陽 (c) 張三丰 (d) 邱長春 (e) 譚長真 (e) 王天君]

『孚佑上帝天仙金華宗旨』全十三章（天仙嗣派廣化子惠覺、つまり蔣元庭による最終的注釈付）

（附）『金華闡幽問答』（天仙嗣派廣化子惠覺、つまり蔣元庭による最終的注釈付）

(跋 1) 天仙太乙金華宗旨後跋 [嗣派弟子通宵]]
(跋 2) 天仙太乙金華宗旨後跋 [金華嗣派弟子宇菴屠]正化子法嗣恩洪校注
(跋 3) 天仙太乙金華宗旨後跋 [待濟弟子志秋]

D-1 「凡例」『全書正宗』

《金華宗旨》、後教外別傳，天仙的派，非僅淨明之道，如《宗教錄》等書也。學者非伐毛洗髓，深得金丹三昧者，未必能知此書之妙也。

後の、教外の別伝によれば、『金華宗旨』は天仙派に属していた。『（浄明）宗教録』などの書籍のように、浄明道だけのための文献ではないのだ。古き己を改善しない徒弟や金丹の三昧を深く得る徒弟は、必ず、この書の神妙な教えを知りえないであろう。

D-2「天仙太乙金華宗旨後跋」(志秋)

金華之關於道妙者固鉅，而深得宗旨則為尤鮮。此非天仙之傳不足以明之，更非天仙道祖不克以示茲妙典也。

道の玄妙な教えと『金華』は固く結びついているが、その宗旨を獲得できるものは殆どいない。此れは天仙の伝統なくしては決して明らかにならず、また、天仙道の祖（つまり呂洞賓）にあらずしてこの玄妙な典籍をここに示すことができる者はない。

D-3「天仙太乙金華宗旨後跋」(志秋)

因思孚佑帝君名天仙派，必有留傳字句。詢之惠覺，蒙敬述云:昔聞有二十子曰:寂然無一物，妙合於先天，元陽復本位，獨步玉京仙。并告小子志秋曰: (…)我孚佑帝師天仙之始祖也，宏教恩師天仙之二祖也。子其敬誌之。

思うに孚佑帝君（つまり呂祖）が天仙派を命名した時、必ずや字句が一緒に伝えられたはずである。恵覚（つまり蔣元庭）にこのことを尋ねたところ、彼はうやうやしくこう述べた。「以前に二十字から成る詩句を聞いたことがある。（それは次のように言う。）“寂然無一物，等・・・”と。並びに私、志秋に告げて言う。(…)「我らの 孚佑帝師は天仙派の始祖であり、宏教恩師（柳守元）は第二祖である。お前はこのことを、敬意をもって覚えておかなくてはならない。」

D-4『金華宗旨』の最初の四版に関する要点

（一）『金華宗旨』は、元来、江蘇の太乙金華派の徒弟たちの毘陵壇において、一六六八年に起こった扶乩による啓示の成果であるとされていた。

（二）一六九二年、二回目の霊示の後、屠乾元によって記録され、張坎真によって編集された。この時点では二十章から成り立っていた。

（三）一七七五年、邵志琳の編纂を経て、『金華宗旨』は呂洞賓による宗旨だけを提供する十三章構成となった。呂祖を祭り、呂洞賓信仰こそが道教という表現であると考えていた高官・文人たちの間に流布したのは、この十三章形態のテキストであった。恐らく、邵志琳や陳謀のような編者は、このような意見を持っていたと思われる。

（四）一八〇三年に、蔣元庭が呂洞賓信仰を、全真道系にも認められた天仙派に属する扶乩壇の設立と連合させた。

（五）天仙派は『太乙金華（派の）宗旨』という元々の書名を私的に活用し、『天仙（派の）金華宗旨』に変えた。これによって、扶乩による『金華宗旨』の文献の拝受とその流布のための、太乙金華派と同等な権威が示された。

（六）第三、第四版の編者である蔣元庭の主張は、「全真道の正統な道士である」と認識されていた天仙派の徒弟たちと、浄明道に属する太乙金華派の徒弟たちとの間の継続的な競争の跡を示している。後者の系譜は「全真教南北のいずれの宗」とも違うものとして示されていた。蔣元庭は、次のように示唆している。『金華宗旨』は太乙金華派の文献で、もともとは『浄明宗教録』など、浄明道の文献に収められていたのであろう、と。これらの文献（『金華宗旨』と『浄明宗教録』など）は、浄明道とその分派によって独占的に所持されていた。天仙派の人々が反感をいだいたであろうと思われるのは、こうした主張だったのである。

資料 E: 清・閔一得(一七五八～一八三六) 編『道藏續編』二十三種（四冊）一八三四年、第一種 (第一冊)『呂祖師先天虛無太一金華宗旨』

序 金蓋山人龍門第十一代閔一得 道光辛卯(一八三一年)(下記載資料 E―２参照)

『呂祖師先天虛無太一金華宗旨』【蔣侍郎元庭 先生輯 金蓋山人閔一得訂政〕
閔一得による紹介文より始まる。（下記載資料 E-3 参照）

E-1 陳銘珪『長春道教源流』巻六、 二八 b。
世稱龍門、臨濟半天下，謂釋之臨濟宗，道之龍門派也。

E-2 閔一得序「呂祖師先天虛無太一金華宗旨」『道藏續編』第一冊、一 a-b。
道祖孚右帝君、興行妙道天尊，志在普度，懷有醫世鴻願，乃體『先天虛無太一金華宗旨』十字玄義，著書十有三章，以作後學醫世張本。文由是成，教有是授，天尊玄旨蓋如此。(…) 是書道旨、孚右帝君初證道果，四大已化，未及醫世，乃著詩三章，題曰『至教宗旨』。宋元之際，業已梓布，其次章，即是書「逍遙訣」也。是書出於康熙戊辰歲，演成於金蓋龍嶠山房，實為陶靖菴、黃隱真、盛青崖、朱九還、閔雪簑翁、陶石菴、謝凝素，諸名宿，皆醫世之材。

E-3『呂祖師先天虛無太一金華宗旨』に対する閔一得の紹介文
是書出於康熙戊辰歲，金蓋龍嶠山房宗壇所傳，本山先哲陶石菴先生壽諸梓。

E-4「陶石菴先生傳」『金蓋心燈』三巻、一〇b 。
(…)上承呂衛之宗，不替邱王律派

〔それは、〕上は呂（洞賓）と衛（正節）の宗派にまで遡り、邱処機と王崑陽の律派と取って代わることもなかった。

E-5「泄天機」『道藏續編』第 一冊、六 b。
醫世一宗、律宗之枕祕。(…) 如或不信此理，請讀《碧苑壇經》，得承師訓。謹補述之。

医世宗は、律宗の枕秘・・此の理を信じない者は、どうか『碧苑壇経』を読み、師の訓戒を受けてほしい。私（閔一得）は、謹んでこの補注を述べておく。

E-6「呂祖師先天虛無太一金華宗旨」『道藏續編』第一冊、一〇b。
山本此下，載有王崑陽律祖玄論。時為康熙戊辰秋，律祖自北南來，館於杭城宗陽宮。靖庵、隱真往謁，呈上此書。律師鄭重其儀，拜而閱之曰：“太上心傳、備於此矣。是乃即世圓行之功法，而淑世功驗亦於此卜，不可偏在一身看。…二三子毋自歉，亦毋自恃，大行正有待也。“乃命小子識之。今故附梓於後，後學者勉之，太定謹白。

（当山の本〔陶石菴の本〕、ここに王崑陽律祖の玄論を記す。康熙戊辰〔一六八八年〕の秋に律祖は北から南に行き、杭州の宗陽宮に泊まった。陶靖菴と黄隠真が〔そこへ〕いって〔律祖〕に謁見し、この書を贈呈した。律師はその儀を鄭重にし、拝を行ってこの書を閲読し、そしてこう言った。「太上老君の心伝はこの書に全て備わっている。これはこの世での完全な修行の功法

であり、また、世を救う功績もここに予見されているが、この予言から一方面に偏ってみてはならない。皆さんは、自ら謙遜することも、また自ら恃むこともあってはならず、大行〔高い道徳性と品行〕とは、待つことにあるのである。」と。

そこで、同士たちに之を識る〔覚える〕ことを命じる。今、その故に、梓〔版木〕に附して後に〔伝える〕。後学の者よ、これに努めよ。〔陶〕太定〔＝陶石菴 ?〜一六九二〕、謹んで申す。

E-7「皇極闔闢仙經」『道藏續編』第一冊、五 b。

律祖於順治康熙間五開演鉢堂，付授太上三大戒。弟子三千餘人。傳戒衣鉢，有《呂祖醫世說述》，則得受者有三千餘部。豈非真道之大行乎？況律祖戒堂，開在京邸白雲觀。爾時佛道兩宗傳戒，非奉旨不得私開。其所傳，有律、有書、有手卷。卷中載歷祖支派，自太上而下。所傳戒偈，或五言，或七言，或四言，累代相承無缺。

(…) 律祖三傳而道遂絕。今嘉慶間所開演鉢，邱祖戒本失傳。近所傳訪諸《淨明宗教錄》，與邱祖所傳，小同而大異也。我山先輩，亦守戒焚之，書則錄本倖存，而卷律亡矣。

順治(一六四四〜一六六一)康熙(一六六二〜一七二二)年間に〔王崑陽〕律祖は五度鉢堂を開いて、太上三大戒を伝えた。弟子の数は三千余名。伝戒衣鉢に、『呂祖醫世説述』が含まれていたので、三千部あまりが受戒者に渡った。まことに真道の偉大な行いではないか。ましてや律祖の戒堂は首都の白雲觀に開かれた。当時は仏教、道教両宗の傳戒には王朝からの勅命を受けたのでなければ、私的に行うことはできなかった。伝えられたものの中には、律と書と手巻があった。手巻の中には歴代の祖師とその上は太上（老君）からはじまる支派が記されてあった。伝えられてきた戒偈頌（つまり派詩）は、五言、七言、または四言詩の体裁で、代々欠けることなく伝えられてきている。・・・〔王崑陽〕律祖から三代後に、〔この傳戒の〕道は途絶えてしまった。今の嘉慶帝の御世（一七九六〜一八二〇）に開かれた演鉢〔堂〕では、邱祖の戒律のテキストは最早伝えられない。近頃の伝戒では『淨明宗教錄』の中にそれを求めているが、〔このテキストは〕邱祖の伝えるところと同じところ少なく、異なるところ大である。我が〔金蓋〕山の先輩たちも戒律を守ってこの〔邱祖の〕伝本を焚いてしまった。〔倖いにも〕、書は抄録本が残っているが、手巻と律は失われてしまった。